〔泌尿紀要21巻6号
1975年6月〕

随　想

泌尿器科にもPOシステムを

岡　本　重　禮*

医者でありながら日常使われているカルテということばに少なからず拒絶反応を示したくなるのは私だけだろうか．日本の医学の黎明期を明治初期とするならば，過去100年間，日進月歩の医学とはうらはらにカルテと呼ばれている診療記録だけはほとんど変ることなく今日に至っている．簡潔にだれにでも理解できることばでしかも科学的に記載することがいかにむずかしいことか．

記載することば一つ例にとってみても，日本語で書けば表現に苦労するし，日本語にドイツ語や英語をまぜればこっけいなものになる．ときに外国語に堪能な人が，独文や英文で書くこともあろう．しかし，これとて母国語よりまさるとは思われないし，正確な表現を欠くことがあるかも知れない．第一，日本人が外国語で記載することじたい不自然である．

英語ではカルテをチャートというが chart とはがんらい海図のことであり，語原上の意味は知らないが，診療記録は航海をするときの海図のように明確であるべきものなのであろう．

米国ではどこの病院に行っても Medical Record Library (MRL) が独立したセクションとして設置され，専門のライブラリアンが活躍していることは周知のとおりである．使用する疾患名はすべて International Classification of Diseases (ICD) を用い，チャートはそのコード番号によってみごとに整理される．このチャートの作製に当っては，医師は大きな責任をになわされ，またこのチャートをとおしてオウデットされているのである．こんにちの米国の臨床医学はこのような診療記録の集積を土壌として開花したといっても過言ではないであろう．ところでこの米国の診療記録システムも一朝一夕にしてできあがったものではない．長い歴史の中で改良に改良が加えられたという．とくに過去10年はマイクロフイルム化が普及し，大多数の病院がこれをなしとげた．そしていまやこれにコンピューターが導入されつつある．診療記録をコンピューターに転載するにはチャートがそれ相応に合理的に記載されなければならない．ちょうどこのようなところに，米国でＰＯシステムが発表されたのも必然的なものといえよう．

POシステムは Dr. L. L. Weed が1969年に刊行した"Medical Record, Medical Education and Patient Care"の中で提唱した問題志向システムによる診療記録の新方式である．日野原重明著"POS—医療と医学教育の革新のための新しいシステム"から引用すると Weed の新しい診療記録の様式は，患者の問題点を中心に理論的に考え，分析し，総合し，計画し，実行する．そして科学的に監査されるシステム運用の一つの道具であるという．

PO システムは基礎データ，問題リスト，初期計画，経過記録の4つの要素からなる．基礎データには患者の生活像，病歴，診療所見，検査データを記載し，問題リストは患者の問題点を箇条書きにする．また初期計画には診断上または患者の診療上必要な作業計画を，経過記録にはおのおのの問題点の経過状況を患者の訴える主観的情報，検査上現われる客観的情報，医療従事者の判断，診療方針に分けて記載する．そして医師，看護婦，栄養士，ケース・ワーカーなどすべての医療従事者が同一のチャートを通して，自ら分析し，他から批判されつつ患者の医療に当れるようにくふうされている．

さてこの PO システムはすでにわが国でも数カ所の病院で試査されている．しかしまだチャートの中央化も不じゅうぶんな病院の多い現状を考えるとき，専門各科が同時に PO システムを始めるのはかならずしも容易ではない．私は専門各科別にそれぞれの情況に応じてスタートし，やがて病院全体に及ぶようなかたちをとるのがとりつきやすいと考える．

泌尿器科には先天異常，職業病など患者の生活環境と関連のある疾患も多い．POシステムは既往歴とは別に基礎データのなかで patient profile "患者の横顔"に重点をおいて，生活像を詳細に記載するシステムである．さらにまた泌尿器科では高齢者が多く合併症を有する率も高い．PO システムは問題リストにこれらを箇条書きにしてリストアップし常に医療従事者の目にふれさせるシステムである．

私はいつの日かわが国の泌尿器科にも POシステムが導入される日をのぞむものであるが，私自身まず簡潔な日本語を土台に，ICD と数多くの略語を用いただれにでも判読できる PO システムによるチャートを作成することを数年間の課題にしている．

* 聖路加国際病院泌尿器科医長